七夕朗読会 池上 彰さんをお迎えして

心をつなごう！前向きに生きるために。

Pick Up ピックアップ

一昨年・昨年に続いて三回目となる、池上 彰さんをお迎えしての公演。今回は七夕に朗読会を開催します。七夕は織姫と彦星との「出会い」の日。朗読会ではそんな人と人との「出会い」についてもう一度見つめなおすきっかけになるような、ちょっと前向きになれる時間をお届けします。本公演の企画者であり出演者である〈公財〉八王子市学園都市文化ふれあい財団　村松真貴子理事長に見どころをお聞きしました！

●この企画はどのように生まれたのでしょうか？

私が『愛、深き淵より。』の著者である星野富弘さんを知ったのは、以前池上 彰さんと担当していたニュース番組で、富弘美術館を取り上げたときでした。その後、この本を読んで感銘を受けました。以来、悲しい時やくじけそうな時に元気をくれる、励ましてくれる、バイブルのような、いつも心の片隅にある本です。

この数年、私たちは、新型コロナウイルス感染症によって以前と大きく異なる社会を生きてきました。その中で、人との関わり合いが希薄になる経験をされた方も多いと思います。誰かと共に考え、感じ、喜び、悲しむ、「共感する力」というのは生きていくうえでとても大切なことだと思います。でも、コロナ禍で一緒に笑ったり泣いたり、なかなかできなかったのではないでしょうか。

1990年から3年間、NHK情報番組「イブニングネットワーク」を担当していた時の様子

だから、コロナ後の社会をどう生きていったらよいのか、考えるきっかけになればいいなと思って企画しました。コロナ禍で悲しいお別れを経験なさった方もいらっしゃるでしょう。希望を見失ってしまったという方もいらっしゃるかもしれません。そういう方の希望の光になればいいなと思っています。

●公演の見どころは？

朗読は、自分ではない人が書いたものを読むので、どう感情を移入するかが難しいところです。でも、星野さんの『愛、深き淵より。』は、読み始めたら共感しながらパーッと最後まで読めてしまうような作品です。星野さんが、絶望の淵からどうやって希望の光を見出したのかが書かれているのですが、何年間も病院のベッドの上で過ごしていた星野さんが初めて文字を書くことができたときは、うれしくて私も泣いてしまいました。まるで自分のことのように喜びながら読んだことを覚えています。私と同じようにこの本に出会えてよかったと思ってもらえるような朗読ができるよう頑張ります。

また、池上さんにも朗読をお願いしました。池上さんの朗読をしっかり聞ける、なかなかない貴重な機会かと思います。池上さんはジャーナリストとして、ニュースをどう伝えるかをずっと模索されてきた方ですが、ニュースを読むことと朗読は「何を伝えたいか、伝えなければならないか」という点で似ていると思います。そんな池上さんならではの素敵な朗読も本公演の見どころです。

朗読していただく作品、「君たちはどう生きるか」は池上さんがお父様から勧められ、とても感動した本だそうで、これを読みたいとおっしゃってくださいました。膨大な数の本を読まれる池上さんのライブラリの中から選び抜かれたこの本は、青少年の人たちに聞いて欲しいと思います。失敗してもやり直せるし、嫌なことからは時に逃げてもいいんだよと教えてくれます。

今回の公演ではそんな私たちおすすめの二冊をお届けします。作品を読んだことがある方もない方も、ぜひお越しください。

公演情報については、最終ページをご覧ください。

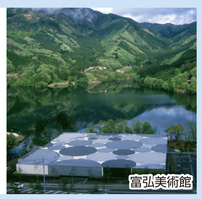
池上 彰さんと富弘美術館より、本公演に向けてコメントをいただきました！

七夕朗読会では、『君たちはどう生きるか』を朗読します。私はこの本を小学生の頃に読み、とても印象に残りました。
さて、皆さんは何のために生きますか？
この機会に、私と一緒に会場で考えてみましょう！

池上 彰

不慮の事故で手足の自由を失った星野富弘は、入院中支えてくれた人達へ感謝の思いを伝えたいと、口にペンをくわえて手紙を書き始めます。余白に花の絵を描き添えたことが、詩画の原点となりました。身近な野の草花を見つめ、いのちの輝きを描いた作品は、多くの人たちの心を優しく包みます。朗読を通して、ぜひその魅力を感じてください。

富弘美術館


富弘美術館

◇ 過去２回の公演 ◇

第1回：2021年11月13日(土)

真貴子と素敵なお客様
～池上 彰さんと佐藤秀仁さんをお迎えして～

池上 彰さんと、髙尾山薬王院から佐藤秀仁さんをお迎えし、「今」を思いっきり楽しんで生きるヒントや夢をもつ大切さについてお話しいただきました。

第2回：2022年10月10日(月・祝)

池上 彰 講演会
社会のために私たちができること

社会のために私たちができることとは？というテーマのもとお話しいただきました。未来を担う八王子ユースオーケストラと、盲目のギタリスト 田川ヒロアキさんの演奏と併せて2部構成で開催。

動画で星野富弘さんのおすすめ作品を紹介！

打楽器奏者・作曲家 永井 朋生さん Special Interview

Special Interview スペシャルインタビュー

八王子市出身・在住で、国内はもちろんのことフランスやリトアニアなど国外でも広く活躍されている打楽器奏者の永井朋生さん。現在、10年間で八王子市内を巡る『八王子芸術祭』の中のプロジェクトで、永井朋生さん監修のもと、八王子産の材料を使ったオリジナル楽器を制作しています。今回は、永井さんご自身のライフワークや、制作中の楽器についてなど、様々なお話を伺いました！

photo:Makoto Ebi

東京藝術大学大学院修了。世界各地で出会った素材から音を見つけ、自ら楽器から制作。独自のコンセプトに基づいて、ソロやバンドでの国内外ライブ活動および、TV、映画のサントラ制作をする。三保松原文化創造センター「オトノキ」、南方熊楠記念館「南方熊楠音楽」、JRきのくに線の31駅のホームの音楽「Sounds for 31 Stations」、天王洲アイルセントラルタワービル内の音楽等の公共施設空間の音のデザインも多く手がける。

●まずは、普段のご活動についてお聞かせください。

パーカッショニストであり音楽家として、打楽器を演奏したり、映画映像作品の音楽を作曲したりといった活動をしています。主に自分で作った楽器を演奏していて、演奏する場所やコンセプトに合わせて音素材を探すところからスタートし、楽器をつくって、作曲をすることが多いです。

●その形にたどりついたのは、どういう経緯だったんですか？

基本的に子どものころからものづくりの世界で生きてきたんです。父が木工をベースにしたプロダクトデザイナーで、小さいころから必要なものは〝つくる〟という教えでした。家に木工の道具も一通りあって、小学生の頃からおもちゃでもなんでも、なければつくるのが基本。ロボットのプラモデルなんかも木で作っていましたね（笑）

●活動の拠点はどちらなんですか？

八王子市内の高尾にスタジオを構えていて、そこが一番のベースになっています。打楽器なので、音環境的に山の中で場所を探して、ここにたどり着きました。この場所も、弟と親父と一緒に草むしりや基礎工事から始めて、半年くらいかけてつくり上げたんですよ。市外だと、リトアニア・フランス・アイスランド・西会津での活動が多いです。北ばっかりですね（笑）でも、北の感じが好きなんです。

●作曲をされる時に、アイディアが降りてくる場所などはありますか？

かなりプライベートな状況で…お風呂に入る前の脱衣所が多いんです。いつもそれを期待して風呂に入るわけではないんですけど、だいたいここで浮かぶというか。それをお風呂に入りながらまとめ直して、お風呂からあがってメモに残して…常にアイディアっていうのは考えていて止まっちゃうことはないんですが、基本的にどうしようかなぁと漠然と考えているものがほどけるのは、この場所なんです。

八王子市川町の楢の木をリサーチ

●芸術祭に向けて、どんな楽器を制作していますか？

一昨年くらいからずっと〝八王子の音〟というのを探していて、桑や絹糸、八王子の土（陶器）などから何か音が生まれないかと考え始めたんですが、まずはこの土地で育った木材を使った楽器を作ろう、と。今回、小津の栗の木を切っているところにたまたま立ち会わせていただいて、その木を使わせていただくことになりました。どこから切った木なのかというのが大事なのかなと思ってるんです。ホームセンターなどで出どころの分からない木を買うよりも、この場所で育ったストーリーに紐づけてアイディアを注ぎ込む。それが自分の中では重要なファクターになっています。

小津倶楽部の皆さんに栗の木をいただき、木材のカットもお手伝いいただきました。

●どんなプロジェクトになりそうですか？

芸術祭に合わせて、10年の間に八王子市内を巡っていく構想なので、これからどういう風に成長していくのか楽しみにしています。ネットでなんでもポチっとすれば手に入る世の中だからこそ、それぞれの〝もの〟にあるそれぞれの歴史を大事にする、その意味を提示していくことができたらと思っています。僕が音楽活動をする中で、根っここにあるこのコンセプトは、切っても切り離せないもので。現代社会でますます希薄になっていくであろう、〝もの〟のルーツに対する根源的な意識を、入れ込んでいけたら嬉しいですね。

栗の木で木琴を制作中

楽器制作プロジェクトについては、今後、八王子芸術祭の公式ホームページで随時発信予定です。二次元コードよりぜひご覧ください！

八王子芸術祭 ホームページ